

La côte sauvage

荒れた海辺

ジャン＝ルネ・ユグナン 荒木 亨訳

筑摩書房

荒れた海辺

ジャン＝ルネ・ユグナン 荒木 亨訳



筑摩書房

荒れた海辺

訳者紹介

荒木亨（あらき とおる）
昭和六年、札幌に生まれる。東京大学文学部フランス文学科、同比較文学大学院卒業。現在、フランス国立東洋語学校講師。訳書にユグナン『荒れた海辺の日記』、アラン『幸福論抄』（共訳）がある。

昭和四十年十二月二十日 初版発行

定価 四五〇円

訳者 荒木 亨

発行者 古田 晁

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京（二九一）七六五一（代表）
振替 東京 四 一 二 三

© 1965

印刷・芙蓉印刷 製本・鈴木製本

目次／荒れた海辺

5／ジャン・ルネ・ユグナンについて

荒
れ
た
海
辺

第一章

宵闇の中を気づかれずに近づいて、数歩の所で息をつめて立ち止まった。急に彼女がふり向くので、榎の木の蔭に隠れる。暗い中にもう彼女の顔だけしか見えない、まわりをすっかり青い花の斑にかこまれて……ライターを取り、木の前に手を伸ばした。焰が一瞬揺らめいて消える。

「だあれ……」ゆっくりと彼女は聞く。

じっと、ライターを手にとって、彼はもう息をしなかった。しかし、妹が、爪先立って、首を傾げて（黒い髪がほどけて肩のまわりに垂れている）、木の方に進んで来た時、彼はにっこりする。

「アンヌ……」

「アンス！」

同じ呼び声が、同時に家の方から聞こえて来たが、アンスはオリヴィエの声をしか聞かなかった。立ち止まり、オリヴィエがわからないという風に彼女は首を振る。しかしもうオリヴィエの腕に抱かれ、物も言わず彼は妹を揺すってやった、その髪の匂い、巴旦杏の匂いを吸い込みながら……。

「こわかったか、アンス。こわかったか」と彼はやさしく聞いた。

ふくろうが飛び立ち、何かが枝から枝へころげたが地面には落ちなかった。オリヴィエは思わずぶるっと震え、二人は離れる。

「どうやって来たの。自動車の音がしなかったわ」

「道に置いて来たんだよ」

砂の小道を行く二人の鈍い足音、その庭の中の道の端にある白い柵の戸ががたと揺れるのがもう聞こえて来る。木々の間の道の、曲り角の十字架像……自動車のドアはまだ開いていた。

「兄さんが着くのは明日だとママンは思っていたよ」

「お前はこう思っていたの」

「わからなかったわ」

彼は自動車の室内灯をつけ、妹の方に身を傾げ、壊れやすいものを見るような、しかし情に動かされない眼で彼女をじっと見つめた。

「疲れたでしょう。今朝パリを発ったの」

「何ともないよ」

彼は妹から眼を離さなかった。彼女は急に顔をそむける。

「兄さん、変わらないのね」

「お前は」

「ピエールが三日経つと来るのよ。ピエールの手紙着いたでしょ」

答えずに、車は動き出した。オリヴィエの唇は神経質な微笑を浮かべていた。彼の眼は、古い井戸、つたで覆われた鳩小屋、人の手のはいらぬいぶどうの葉に隠れたやぐらが次つぎと闇の中から現われ、石段の上に腕を組んで立っている人の影が、ヘッドライトに照らされた家の正面に大きくなり、いっばいに広がり、ぐらぐらと揺れて消えるのを追っていた。

「ママン喜ぶわよ……」

オリヴィエは投げやりに黒い髪をかき上げると車から降りる。アルドルーズ夫人は石段の上に立ったまま動かなかった。やつれた体にまよっている赤い部屋着のひだが少しばかりの風に揺れ、

後の玄関に落ちてゐる影がゆっくりと動いている。少し上の、ドアの端の所で、虫や蝶が陶器のシェードの掛かった電球にかちかちとぶつかっていた。オリヴィエが二階に目を上げると、窓の戸の間にベルトの頭が隠れた。手を後に伸ばし（自動車の鍵を右手に持って）、オリヴィエは埃と汗の冷えた匂いを嗅ぐ。弾力のない疲れた皮膚がオリヴィエの唇に触れ、母がオリヴィエに接吻を返すと、ほくろの毛がちくりと彼の頬を刺した。

「驚くじゃないか、お前」

中へはいるのに母の体に軽く触れねばならなかったが、彼が触れるとその体はかすかに揺らいでいるのだった。母を残して玄関の方に歩み寄りながら、まず壁を、それから錬鉄の門灯を、いつも空っぽの傘立てを、巡礼の帽子を被り杖を持った等身大の聖ジャック・ド・コンポステルの木彫りの像を、ゆっくりと見つめた。身動きもせずに彼を待っていたこれらの親しい物、身動き一つせず、死ぬという不誠実な行為にも出ないこれらの物たち……「無事だったかい、道中は。お前、無事だったかい」。そこ、その石の階段の下、暗い隅の、邸中のくもの隠れ家だった埃っぽい場所で、いつもオリヴィエは隠れん坊遊びのアンヌを見つけたのだった。一緒に遊んだ子供時代を通じてずっと、アンヌは一度も隠れ場所を変えなかった、二度と見つからなくなることをごわがって……。彼は何度も彼女の前を見ないふりをして通り過ぎた。暗い所で息を切らしている

のを聞きながらそこを遠去かって、呼んで、呼んで、また階段の方に帰って来て、身を屈めて下を覗いてみると、ぱっと彼女が飛びついて来るのだった。やっぱり隠れたままで、だが今度は彼の腕の中に……。

「おや、もう着いたの」

「ベルトや、セーターを着ないと風邪を引くよ」とアルドルズ夫人がいう。

「自動車の音聞こえなかった？」

「ええ、私縫い物をしていたの」

「変だな、窓に顔が見えたと思ったが」

階段の曲り角にじっと立って、唇をキッと結んで、ベルトは弟に視線を落とし、あかくなった。階段を降りつくすと、彼女はオリヴィエから二足ばかり離れたところに立ち止まり、

「うっかりしてたのよ。いつ発つの」と聞いた。

「だってもう発ちやしないよ」

オリヴィエは微笑した。蚊にさされてふくらんだベルトのくるぶし。「アンヌがお前に晩ご飯を用意しているよ」とアルドルズ夫人がいう。

「姉さん、顔色がいいね」

「私、眠れなくてももう三日になるわ」

「顔色がいいっていうんだよ」とオリヴィエはくり返すと、手を伸ばし指の端でベルトの額に触った。

ベルトは幅広いその顔を後にそらすと、横眼ですばやくオリヴィエを見た。

「ママンにあんたのトランクを持たせるつもり」

オリヴィエは階段のところで母親からトランクを受け取り、自分の部屋のしきい際でふり返ると、「ちょっと待って、ぼく少し一人になりたいんだ」とやさしくいって、母親の眼の前でドアを閉めた。

「ママン。降りて来ないの」と下からベルトが叫ぶ。

彼はトランクをベッドの足の所に置き、部屋を横切って窓を開けた。途中でだんろの上の壁にチラと何かが反射するのを認めたが、別に気にしなかった、というよりほとんど気づかずすぐ忘れてしまった。夜は海の匂いがした。ひるがおが斑を打っている生垣、縦の葉の黒い小さな歯。丘の上の空は明るく、農家の屋根がキラッと光る。まゆみの木がさらさらと震え、オリヴィエの額の髪が動き、縦の頂きが揺れる。それから急にすべてが静まってしまう。休暇の日々、この同じ窓でオリヴィエは夕方何時間も待ちつづいたのだった。鳥の鳴き声が急に止み、風が落ち、花

の匂いがいっそう強くなる。しばらくするとアンヌが檜の木の間を帰って来る。オリヴィエの部屋は庭と反対に向いているので彼女の姿は見えない。しかし、柵がギーと鳴るのが聞こえ、牛乳の罐のカランカランという音がだんだん近くなる。彼女は家の反対側を、頭を垂れ、お下げを頸にまっわからせ、一人ぼっちで歩いている。反対側を、目に見えずに、動かない海を後に帰って来る。その水平線にはきつと赤い煙突の船が一つ……その間中オリヴィエはじつと自分の部屋の窓によつて、家の裏側に面して、全身の力を集めて耳傾けている、顔の筋肉一つ動かさず……ある晩いくら待っても彼女は来なかった。下に駆け降りてみると、アンヌは牛乳を瓶に入れて持って来ていたのだった。

オリヴィエはふり向いて緑色のひじ掛け椅子の背を撫でた。子供の頃、頭をそのクッションの中に突っ込み、息が詰まるまで両手でクッションをおさえていたこともあった。この陶製のボンボン入れには昔はひなげしと呼ばれる赤いボンボンがはいっていた。今は？ 呼子が一つ、空になったアスピリンの箱、黄色くなった巻煙草が一本、それに五サンチムのアルミ貨が一枚。彼はその巻煙草をくわえ、ライターをつけ、ふと目を上げる。と、一つの顔がじつと彼を見ている。彼は思わず後に跳びのいた。窓のカーテンが動き、顔はすぐに消えてしまった。

「どうしてこの鏡をぼくの部屋に置いたの」

彼がドアを開けると、母は急いでふり向いたので、部屋着の裾が少し開いた。

「私じゃないよ、お前、ほんとうに。私はお前の病気をよく知ってるからね」

「それじゃベルト姉さんだな」

「オリヴィエ、ご飯が出来ていてよ」とアンヌが叫ぶ。

「おやおや、お前たち、また始めるのかい」

「始めるって、何をさ」

*

二人は、ならんで、ゆっくりと、同じ歩調で玄関の石段を降り、白い柵の所まで歩いて行った。二人の姿が一步ごとに小さく遠去かって行くにつれ、古い樫の並木は大きくなるようにみえ、夜の色が濃くなって二人の姿をぼかし、ついにはすっかり包み込んでしまうようにみえた。手もつなぐ、口もきかなかったが、二人の表情はじっと何かに耳傾けているようであった。彼らにこのなかば微笑んだような、陶醉に似た期待の表情を与えたのは恐らく月の光であったろう。夜は二人をじっと窺っていた、そのざわめき、遠くで海が喘ぎ、枝がぼきと鳴り、荒地の方で急に鳥が飛び立つ、そしてこおろぎの、押し殺したような、断続するベルの音……。

急にアンヌが石につまずく。オリヴィエは日にすべすべしている小さな手を取ってやる、握りしめずに、子供の手でも取るように……その手は彼の掌の中でかすかに滑った。

彼はアンヌのことを考えてはいなかった。アンヌはそこにいて、夜の中を、彼のそばで歩いている。彼女が夜そのものであった。彼は他の夜々のことを思い出していた。地下室の匂いのする戦争の夜々、坑道のように板で支えた狭い廊下を、ねずみの性急に引っかく音を聞きながら、今夜のように彼女の手を取って、オリヴィエは降りて行った。母を、ベルトの恐怖を、はるか後に残して、二人がじっとしていると、サイレンが彼らの後から唸りながら降りて来、アンヌは彼ら体にぴったりと身を寄せていた。爆発の音は聞こえなかったが、天井に釣ってある防風ランプが急に震えるとゆっくり左右に揺れ出すのだった。それからもう一度サイレンが鳴り、二人は氷のようなめいめいの寢床に帰って行った。

二人は十字架像の前を過ぎる。月の光が花崗岩の十字架を鋭く嚙んでいた。それから彼らは道に出て、はりえにしだの斜面の間を、夜目にも明るいその花の群がりに沿って、海の方へ滑るように歩いて行く。

「ベルト姉さんはわざとしたのじゃないのよ」とアンヌがいった。その声があまり悲しそうだったのでオリヴィエは彼女の方を見た（が、彼女は顔をそむけなかった）。

「こんなこといわないほうがいいかも知れないけれど、兄さんの帰りの日取りがわかった時、姉さん、日めくりを買ったのよ、手帳も時計も持ったことのないあのひとが……毎日毎晩、寝る前に一枚ずつそれをはがしてたの、私知ってるわ」

「当り前さ、何にもすることがないんだもの」

アンヌがほっと息をついたように思われた。浜辺に面した曲り角の所で突然海が現われる。「兄さんは自分に気に入る人しか好かないのね」とアンヌは低い声でいうと、同時に手を放し、立ち止まって彼の方に向き直った。真正面から浜風を受けて、彼女の髪は立ち騒ぎ顔に掛かる。その間中、彼女は兄をまともに見つめていた、柔かい下あごの線を彼の方に向けて……。

「兄さん、私結婚するつもりよ」

波が浜辺に碎けた。オリヴィエは微笑し、頭を垂れた。小さな石英の粒が道のタールの中に輝いている。彼は波と一緒に引き上げて行く石ころのぱちぱちいう音を聞いた。音が止んでしんと静まった中で尋ねる、「誰と？」そして彼は両方の手をポケットに突っ込んだ。

「ビエールと」

「ビエール？」

「ビエールと」